

渋谷公園通りギャラリーで展示中の作品《熱の部屋》

作成者：村上 慧

2024年2月26日

はじめに

現在、渋谷公園通りギャラリーで開催中の展覧会「共棲の間合 - 「確かさ」と共に生きるには-」にて《熱の部屋》という作品を展示している。この作品内で落ち葉の発酵熱を利用した「足湯」と「サウナ」を制作した。



これは昨年の秋に五人がかりで代々木公園で集めた大量の落ち葉に米ぬかと水を加えて攪拌し、落ち葉に付着している微生物たちに発酵熱を生み出してもらい、来場者は落ち葉の中に足や手を入れ、その熱を体で体験することができる、という参加型の作品になっている。本稿では、《村上勉強堂》にも通じるこの作品の制作過程を報告する。

展覧会のコンセプト

この展覧会について、担当学芸員の河原功也氏は『共棲』は『共生』から発想したタイトルであると述べている。河原氏いわく、共生は人間が生きていくうえで不可欠なことだが、その言葉には調和や一体感を他者に求める息苦しさがあるのも事実で、ここでは隣人とともに住むときの距離感や関係性に焦点を当てるための『共棲』を考えたい、とのこと。

私は以前、札幌で行ったプロジェクト《広告看板の家》（本報告書No.1を参照）において、命が生きることとは熱を生み出しつづけることである、というひらめきを得た。当時の私が書いたテキストを下記に引用する。

渋谷公園通りギャラリーで展示中の作品《熱の部屋》

作成者：村上 慧

2024年2月26日

2022年2月現在、私は作品制作のために北海道札幌市に滞在している。最高気温が0度を超えない日も珍しくない環境で暮らしていると、自分は36.5度の熱を保たないと死んでしまう恒温動物であることを意識させられる。いつもより食事の量が少なかったりすると体温が上がらず、気力が湧かない。冬の札幌にいとすることがよくわかる。

つまり私は熱なのだ。そしてその熱源は私の体にはなく、街の中にあることに気がつく。なにを食べるにしても、街で調達しないと始まらない。スーパーで売られている米、ジンギスカン屋のラム肉や中華料理屋の紹興酒、スープカレーなどには何度も助けられた。食べ物だけではない。例えば銭湯は強力な熱源である。入浴による蓄熱は、私を長時間高く保ってくれる。もちろん街は与えるばかりではない。むしろ常に私は外気によって奪われている。奪われるのと同じくらいの量を街から得ることで、私という現象は保たれている。

私は肉の断熱材に包まれた熱という現象である。

このテキストは「広告収入だけで生活してみる」というプロジェクトの趣旨に即して書かれたもので、貨幣経済は人と人を「熱の連帯」で結んでいる、という事実を伝えるためのものだが、落ち葉に付着している微生物たちにも同じ構図があてはまる。彼らも私たち人間と同じように熱の連帯を結びながら生きており、「熱という現象」であるという意味においては、人間も微生物もまったく同じ存在である。

共生はすでになされている。ただそのことに気がついていないだけで。私たちの体の中においても、例えば腸には100兆個とも言われる微生物たちが生態系をなして存在しており、人間は生まれた日から死ぬ日までにアフリカゾウ五頭ぶんの重さに匹敵する微生物の「宿主」になるという（詳しくはアランナ・コリン著『あなたの体は9割が細菌』を参照）。

そんな熱の連帯を感じるための装置として、私は今回《熱の部屋》を制作した。

木枠の準備



まずは木枠を準備する。幅約1.3m、奥行き3.6m、高さ0.6mで、下にキャスターがついているこの木枠は、私ではなくスーパーファクトリーという展覧会設営業者が制作してくれたもの。これが発酵槽になるのだが、このままだと底から水が漏れてしまうので、二重にした防災シートを内側に張る。これまでに同じようなものを何度か作ってきたが、室内でやるのは初めてである。通常、美術館やギャラリーでは室内で水や土などの有機物を素材とした作品を展示することはできない。しかしここ渋谷公園通りギャラリーと学芸員の河原氏は海のような寛大さでそれを許してくれた。どこからか水が漏れやしないかとヒヤヒヤしたが、結果的にこの防災シートはしっかりと防水機能を果たしてくれた。

渋谷公園通りギャラリーで展示中の作品《熱の部屋》

作成者：村上 慧

2024年2月26日

発酵槽を仕込む



渋谷公園通りギャラリーで展示中の作品《熱の部屋》

作成者：村上 慧

2024年2月26日

落ち葉約2,000リットルに、米ぬか90kg、水200リットルを材料に温床を仕込む。①落ち葉を底が見えなくなるくらい敷き詰め、②米ぬかを上から全体にまぶすようにかける、という工程を何度か繰り返してから、③シャワーで水を撒く。落ち葉と米ぬかのおいしいミルフィールをつくるような気持ちでこの作業を10回ほど繰り返す。途中で来客があり、少年が興味深そうにみていたので作業を手伝ってもらったりもした。

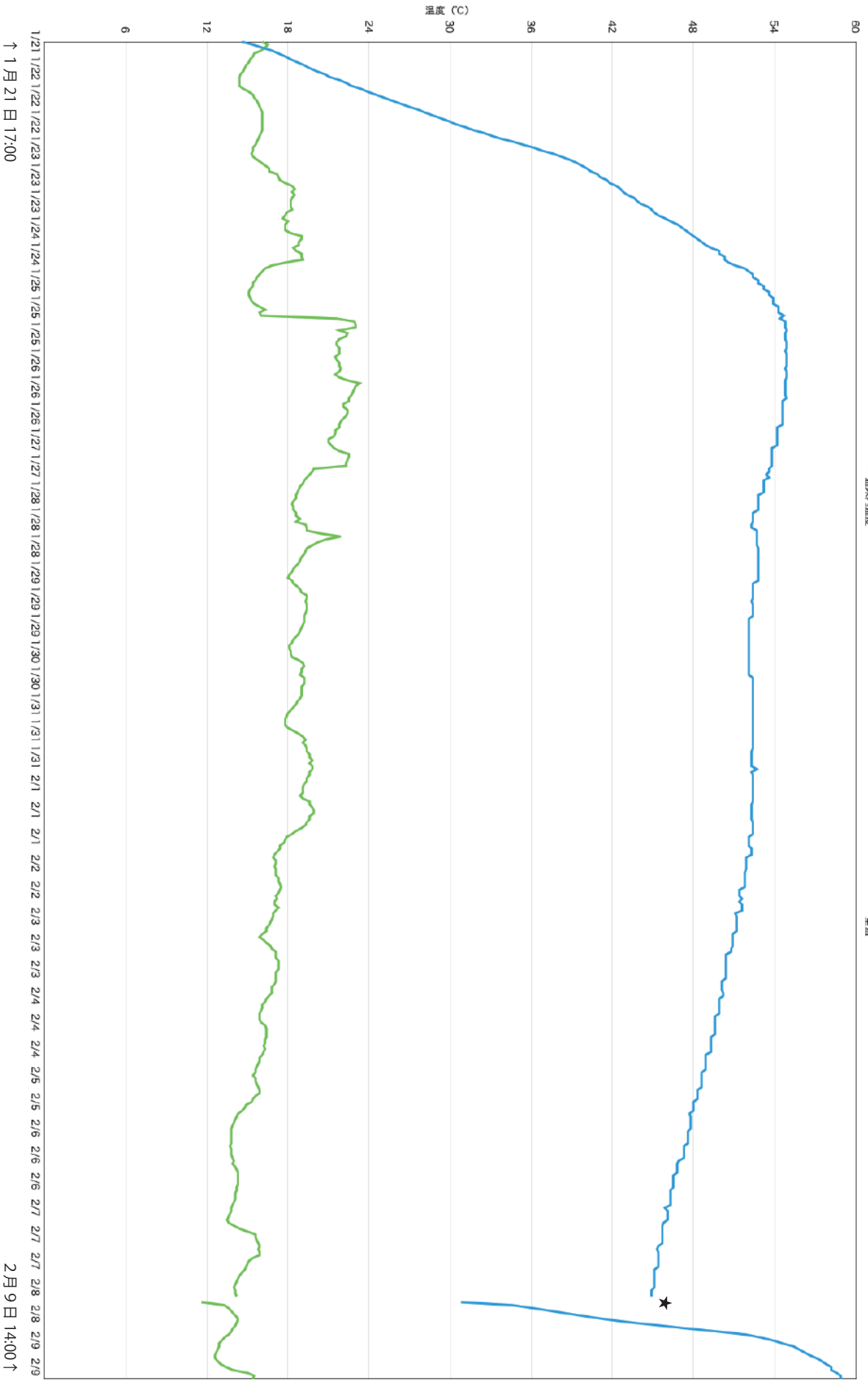
前ページ五枚目の写真は、少年にすこしだけ落ち葉を踏み込んでもらった一コマである。私がこの発酵槽の元ネタにしている「踏み込み温床」と呼ばれるものは、もともと夏野菜などの種を冬のうちに発芽させるための農業の技術である。踏み込み温床においては、温度が上がりすぎるのを防ぐため、こうして体重をかけて内部の空気を抜く（温度が上がるのは微生物の呼吸による影響だが、酸素が不足すると微生物たちが呼吸をしにくくなる）。しかし私の目的は発酵熱で暖をとることなので、高温になってもらって一向に構わない。なので本来は踏み込む必要がないのだが、落ち葉の上を歩くのはとても楽しいのでぜひ体験してもらいたかった。



完成した発酵槽の中央、深さ20cmでいどのところに温度計を差し、温度経過を観察する。実は米ぬかだけで温床づくりを試みるのは今回が初めてだった。これまでに作ったものはすべて、温度を確実に上げるために鶏糞を混ぜていた（温床作りは窒素（N）と炭素（C）の比率が肝心である。C/Nが20程度のときに発酵が進みやすいとされており、落ち葉単体では30～50程度ある。これを下げるために、C/N20程度の米ぬかや、6～8程度の鶏糞を混ぜる、というわけである）。ただ鶏糞を混ぜるとどうしても匂いが気になる。私一人で屋外でやるぶんには一向に構わないが、今回は屋内で、しかも不特定多数の観客が訪れる展覧会場である。鶏糞を使うわけにはいかない。米ぬかだけでどの程度温度が上がってくれるのか、そしてその温度がどの程度持続してくれるのか、全てはやってみるまではわからなかった。最初の温度は14.6°C。次のページに示す棒グラフは、仕込んだ日から数えて19日間、1時間ごとに記録を続けた温度変化である。

— 温床内温度

— 室温



↑ 1月21日 17:00

2月9日 14:00↑

* 上部の折線グラフが温床内温度（中央付近、深さ20センチほど）、下部の折線グラフが室内温度

* 温度は1時間ごとに記録

★のポイント（2月8日11時）で、一度温床を切り返した

渋谷公園通りギャラリーで展示中の作品《熱の部屋》

作成者：村上 慧

2024年2月26日

驚くべきことに、温床は仕込んでから四日で55°Cまで上がり、それから二週間経っても45°Cを下回らなかった。足湯としてはちょうどよい温度が長期間保たれている。これは成功と言ってよいだろう。

冬の札幌でおこなったときは一度60°Cを超えるほどまで温度が上がったものの、十日後には20°Cまで下がってしまい、頻繁に繰り返し（温床を鍬で耕して中に空気を供給する作業）をしなければ暖房として機能しなかった。今回は舞台が札幌ほど寒さが厳しくない東京で、かつ屋内ということもあり、冷たい外気にさらされなかったのがよい結果をもたらしたと思われる。

「屋内」と書いたが、要するに「超しっかり断熱された屋外」と同じである。札幌の温床は断熱が甘かったという反省もあるので、それさえちゃんとすれば屋外でも同じような結果が期待できるかもしれない。微生物たちも壁の厚い快適な家で過ごしたいのだ、ということが今回の実践でよくわかった。



展覧会オープン後

渋谷のど真ん中（会場の向かいにはパルコもある）に大量の落ち葉がある光景は道ゆく人にとっても新鮮らしく、会場の窓の外からは好奇の視線がちらちら飛んでくる。温床に足を入れた観客たちはみな良いリアクションをしてくれる（「え、あったかい...」「これ電気つかってないんですか？」など）。人が温床を引っ掻きまわすことで温度が下がったりしないかという不安もあったが、幸い微生物たちは人が足を入れようが手を入れようが構わないらしく、オープンから二週間が経ったいまでもおおむね40°C以上のポカポカが保たれている。「美術手帖」オンライン版にレビューも掲載された (<https://x.gd/1e8JX>)。

展覧会は5月12日（日）まで開催中。私の他に折元立身、酒井美穂子、スウィングが参加している。どの作品もすばらしく、いつまでもみていられる。優しい気持ちが芽生えてくる展覧会である。